「モッタイナイ」の願いをコメて

呉市立阿賀小学校　四年　切川　翔太

「翔太、まだお茶わんに米つぶが残ってるよ」。

手を合わせ、食器をかたづけようとしたところ、お父さんから声をかけられた。

残っている米つぶの事は分かっていたものの、お茶わんにしがみ付く終ばんの米つぶはハシで取りにくいため、ついついそのままにしてしまう。仕方なしに一つぶずつ口に運んでいると、

「お父さんもな、えらそうなことを言ってるけど、翔太と同じ年のころ、おじいちゃんから同じことを言われていたんだよ」。

と、半分照れくさそうに話しながら続けた。

「これから社会の勉強でも習うと思うけど、お米ができるまでにはたくさんの手間がかかっているんだよ。苗を育て、田植えを行い、いなほが実ってしゅうかくするまでに八十八回ほどの手間をかけることから「米」という漢字ができたという話もあるんだ」。

その話を聞きながら、以前、学校の図書室で借りた本に、「一つぶのお米には七人の神様がいる」という話があったのを思い出した。

毎日、あたり前のように食べているお米だけど、そもそもいつ頃からお米を食べるようになったのだろうかと、ふとぎ問に思った。

それをかい決してくれたのは、ぼくが生まれた頃から両親が小まめにとり続けてくれているビデオだった。題名「翔大、のお食い初めに出てくる生後百日のぼくは、おばあちゃんのひざの上に抱かれ、家族のやさしい笑顔に見守られながら、ふっくらたき上がった記念すべき第一号のお米の一つぶを口にしていた。

「丈夫な子に育つように」「一生食べ物にこまらないように」と、みんなが思いを込めてくれている様子に、最初は少しむずがゆく、はずかしい気持ちもあったけど、これから何万、何十万回と食べていく大きな一歩目を目の当たりにして、とても温かく幸せな気持ちになった。

今、ぼくたちが学校給食やそれぞれの家族であたりまえのように食べているご飯。しかし、ひとたび世界に目を向けると、このあたりまえは通用しなくなる。世界の約十パーセントの人々は、まともな食事を口にすることができず、今もなお苦しんでいると聞く。

ぼくたちにも出来ることはないだろうかと考えた時、「モッタイナイ」という言葉が頭にうかんだ。この言葉は、地球上のしげんを有こう活用するキャッチフレーズとして、ぼくの住む日本だけでなく、世界に広まりつつある言葉と聞いてうれしくなった。自分の家、近所の食品店やコンビニを取り上げただけでも、料理くずやまだ食べられる食品が大量にすてられている。食べ物を残さないだけでなく、計画的に必要な量を買うという小さなことからでも、一人一人が意しきしていけば大きく変わると思う。ホカホカにたき上がったご飯、今日も（ありがとう）と感しゃの気持ちをコメて、いただきます。